

## Let's enjoy Rugby “Kamikaze Tackle”

Judo (柔道)、Sushi (寿司) から Washoku (和食) と数多い日本語がグローバルなものになっています。ラグビーでは“Kamikaze Tackle” (神風タックル) もその一つです。これらの日本語は特殊なニュアンスをもって使われます。

第二次世界大戦後日本でラグビーが飛躍的に普及し国代表 (National Team) もマイナー国からメジャー国へ挑戦を試みた 1960 年代から 1970 年代へかけて「小柄ながら敏捷」という評価がなされました。当時一部に jersey puller (モール・ラックが解消されても、ジャージを掴んで動けなくする) という汚名を付けられたことは残念なことでしたが他方日本の優れている面も注目されました。

ラグビーワールドカップも回を重ね日本もラグビーの盛んな国の一つとして知られるようになりました。世界の 8 強には届きませんがラグビー人口と善戦健闘は広く認められるところとなりました。2019 年には日本でラグビーワールドカップが行われる前にグローバルな「神風タックル」という用語について考察し日本のラグビーについて考える話題の一つになればと思っています。

さて強烈なタックルを hard tackle と言わないで “aggressive tackle” と呼び攻撃的タックルと訳されています。attacking tackle と言わないのはタックルを相手に一発仕掛けるのではなく相手を捕まえて止める過程の中で止める時点で以後の有効性考えて相手と接近し、コンタクトした状態がより「有効に次に継がれていく」タックルを目指していくものだからです。全て用語は解く徳の意味内容を持つものです。正確に理解してプレーすることが肝要です。「神風タックル」は日本人の自称用語がグローバルになったものでしょう。

神風は歴史上二つの場面で登場します。一つは鎌倉時代中期に蒙古から攻められた「元寇の役」であり、もう一つは第二次世界大戦における「神風特別攻撃隊」です。

前者である元寇の役は単なる季節風が吹いただけのもので、歴史的にも偶然以外の何物でもありません。後者は敗戦色濃い日本軍が質量共に相手国に劣るのを精神的な高揚だけで立ち向かい一撃を与えることを願って若者達の命を軽んじる戦いを軍部が強行させたものです。「神風」は現実を無視した空虚な戦いの象徴ともいべきものです。

日本が戦後高度経済成長中に日本人は economic animal という呼び方海外からされました。1970 年代 Twickenham Stadium のバックスタンドの一等地に日本企業 (ソニーと東芝) の看板が見られました。Twickenham の担当者は “best position” という嫌味な説明に animal (成金趣味の日本人) のニュアンスを感じました。

「神風タックル」にもニュアンスを持って使われ始めました。日本人は「必殺タックル」という言葉をよく使います。思い切って飛び込み一発で相手を見事に倒すものです。しかしタックルは必死の覚悟で飛び込むことだけが大切な要件ではありません。

通常は段階的に以下の通りになります。

- ① ボールを持っている相手との距離を詰める
- ② 相手のコースを読んでコンタクトの角度 (コース) を決める
- ③ 肩を当て両腕で抱え込んで身体が上になるようにする

以上 3 点の過程があります。

飛び込みを強調しすぎると大抵失敗するだけでなく危険を伴いプレーヤーに恐怖心を起こさせることにもなります。それはタックルの進歩を遅らせることになってしまいます。

「神風タックル」は資料 1 の表現では結果の鮮烈さからきたものであってその語感から考えても良いタックルを褒めたものと言うことは出来ません。本文に見られる表現では最初の ‘sensational’ という言い方になります。感動的という意味ですが時には感心するという以外にキワモノというニュアンスが加わることがあります。防御について ‘beast’ (ケダモノ) という表現は普通ではありません。wild beast は野獣です。さらに ‘knocking himself out on one occasion’ 自分自身で伸びてしまうのはいけません。

もう一つグローバルな日本語について付け加えておきます。(資料 2 参照)

人間を評価するのに「黒帯」という表現を使います。「空手」「黒帯」をどう考えているのかでしょう。一般的に皆から認められ、信用されている表現であることは間違いなさそうです。細かく見て見ると他の人の shadow 陰や楯になることが時には必要なことがあるでしょう。誰も mess (いじくりまわさなかつた) というのです。crap (ガラクタ、下手糞) レフリーとけなしたことにも、「馬鹿な」ととり合わず、not threatening

脅迫されることなく平然としていたと言うのですから、信頼され信念を認め合っているのです。a black belt in karate は強さと正義感の象徴となっているということです。

フランス代表のラグビーを“champagne rugby”と呼びました。縦コースでサポーターが泡のように湧きだす楽しいものでした。**go forward, support, continuity, pressure** の延長線上にある日本も他のチームに見られないような敏捷性を生かした open 展開を継続する“**four principle**”の技と仕組みを生みだして名付けたものがグローバルになることを夢見ています。

The sensational, hard-tackling centre Tinus Linee, who would later win Bok colours, was a beast on defence, knocking himself out on one occasion with his kamikaze tackling.

Northern Transvaal B also had some serious players: Johan Roux, Chris Rossouw and Conrad Breytenbach would all later go on to become internationals, and there were several others who would become Bulls legends.

Without a doubt this was a huge step up from the first-league club games that I was used to. These were serious rugby players that I would be reffing. But Newlands was empty when I ran on. There were, like, three people and a dog in the stands.

資料1 “CALL IT LIKE IT IS” THE JONATHAN KAPLAN STORY より

Gary, a black belt in karate, shadowed me the whole evening. When I went to the bar for a drink, he was there, just to make sure no one messed with me. Nevertheless, one All Black supporter was so angry he told me to my face that I was a crap ref. He was not threatening, just full of blah blah.

資料2 “CALL IT LIKE IT IS” THE JONATHAN KAPLAN STORY より

2015/07/17  
西川 義行